



[令和 7 年12月10日 定例会発表要旨]

「手稲の歴史・我が家の歴史」

手稲郷土史研究会 会員 一ノ宮 護

我が家の歴史は手稲の歴史

旧士族の集団移転によって「手稲村」が誕生したのは 1872（明治 5）年。同じ年に移住した人の手記から一ノ宮の祖先が既に稲穂に住んでいた事がわかっています。手稲 6 代目となる私は、5 代目の父・博昭から「我が家の歴史は手稲の歴史」だと聞かされてきました。

ただ、記録に残る旧士族の移住とは違い、我が家の祖先については、いつ・どこから移住してどのように暮らしてきたのかさえ、残念ながらほとんどわかりません。

父・博昭はその疑問を解明したいと戸籍や寺の過去帳を調べ、さらに「古老」の記憶を聞き取って、昭和 44 年（32 歳）～46 年（34 歳）にかけて「先達を偲んで」というタイトルで 344 ページにわたり我が家の歴史を記録しました。



いつから手稲に？どこから来たのか？

手稲に移住した初代の石松は文化 11（1814）年生まれ。「古老」の岩本チョンさんによると「藤山のオド」と呼ばれ炭焼きをしていたといひます。現在の稲穂中学校付近に炭焼きガマがあり、「ミヤコのカマ」と呼んでいたといひます。当時、この辺りに住んでいた者は皆、炭焼きかそま夫（木こり）で仕事の合間に麦などを作っていたといひます。

この石松の戸籍がかなり不備なため、一ノ宮がいつ・どこから移住してきたのかがわかりません。そもそも本籍は札幌郡上手稲村六九となっていますが、恐らく「上手稲村」ではなく「下手稲村」の誤記載。和吉の三男となっていますが、出生地など他の記載はありませんでした。

石松の妻・カムの戸籍には亀田郡藤山村（現・七飯町藤山）の平民、喜代治の二女とあることから「藤山の夫」もしくは「藤山のお父さん」の意味で「藤山のオド」と呼ばれていたのかもしれませんが。当時の家はほとんどが掘っ立て小屋でしたが、「ミヤコの家」と呼ばれていた一ノ宮の家は、南部家といって土台のある家だったという証言もあり、「ミヤコのカマ」と合わせて岩手県宮古市付近から移住してきたのではないかと考えています。

手稲に根付いた 2 代目

初代石松の長男・石蔵は本籍地こそ下手稲村六九となっていました、生活の場所、家族構成、生計の手段などは不明。古老の中にも石蔵を記憶している者はいませんでした。

一方、次男の米松は手稲に根付きしました。かなり豪快な人物だったようで、古老の証言では「頑固なのも徹底していたが、頭のきれいな人で、この付近の山仕事の一切をきりもりして、この付近に入植した初代の人々は、みな米松じいさんの指揮で働いていたといひてもいいだろう。」とのこと。

私が子供の頃から親戚が集まった時、「米松は、大嵐の日、風下から原野に火を放ち、燃えた所全てを自分の土地にした」という話をよく聞きました。かなり大袈裟に伝わっていると思われますが、旧土地台帳を調べてみると、現在の国道 5 号線の「万代」付近の国道から J R 函館線の線路辺りの多くを所有していた模

様で、妻のアキに先立たれると、その大部分を売却し、6年かけて日本一周したとの逸話も残っています。

妻のアキも本籍地が岩手県中閉伊郡門馬村と現在の宮古市の出身で、一ノ宮が「ミヤコ」と呼ばれていたのとの関係があるかもしれません。

まとめ

今回は、父・博昭が書いた「先達を偲んで」を整理する形で報告しましたが、今後、新たな視点や方法で「いつ・どこから移住してどのように暮らしてきたのか」に迫れたらと考えています。

—「おめでとうございます」—

本会の活動に多大なご協力をいただいております手稲区連合町内会連絡橋議会の平川登美雄会長が、令和7年度秋の叙勲にて、旭日単光章を受章されました。心よりお祝い申し上げます。



—「たゆまざる歩み」第1巻再版のお知らせ—

10月の本会創会20周年記念講演会の際に行いましたアンケートにおいても、また「たゆまざる歩み」第2巻をお届けした際にもご希望のありました「たゆまざる歩み」第1巻再版について検討した結果、100部の再販を決定し発注いたしました。令和8年1月中旬に出来る予定です。出来次第次号にて報告いたします。

次回定例会 令和8年 2月11日(水) 18時15分～ 区民センター3階視聴覚室

発表内容 「手稲の野球の歴史」 手稲郷土史研究会 会員 和田 勝也

手稲郷土史研究会 会報「郷土史ていね」第213号 令和8年1月14日発行

発行責任者：沖田紘昭（手稲郷土史研究会 会長） 編集：菊池博行・伊藤政克

❖006-0818 札幌市手稲区前田8条11丁目4-5 林俊一 方 手稲郷土史研究会

*TEL 090-3381-4994 *FAX 011-682-9874

❖メールアドレス teinenorekishigmail.com 担当 菊池 博行